戦後中国東北における左翼日本人の動向

―― 長春・瀋陽を中心に ――

飯　塚　　靖

目　次

1. はじめに
2. 敗戦時、満洲の左翼日本人
3. 敗戦直後の長春・瀋陽（1945年８月～11月）
4. 西安・通化での活動と長春への帰還（1945年12月～1946年５月）
5. 長春からの退却と哈爾濱・佳木斯への移動（1946年５月）
6. むすびにかえて

1. はじめに

筆者はこれまでの聞き取り調査により、敗戦後中国共産党に「留用」（日本人を帰国させずに使役することの中国側の呼称）された日本人が1953年からの後期集団引揚でも帰国せず、さらに中国にとどまり中国政府に協力し、一部の人々は中国で人生を閉じたという事実を確認した。53年からの残留の契機は、日本共産党の北京機関及びその対日放送局である自由日本放送での勤務があった。彼らの一部はさらに北京にとどまり、北京放送局、北京大学、外文出版局などで日本語専家として活躍したのである（飯塚④、⑤、⑧）。名前をあげると、横川次郎（1901-1989、東京帝国大学法学部卒、満鉄、北京機関、外文出版局）、鈴木重歳（1908-1975、京都帝国大学経済学部中退、満鉄、北京機関、北京大学）、川越敏孝（1921-2004、京都帝国大学経済学部卒、大蔵省、北京機関、外文出版局）、菅沼不二男（1909-1983、東京帝国大学法学部卒、同盟通信社、満洲国通信社、外文出版局）、三村亮一（1906-1963、京都帝国大学経済学部卒、満映、外文出版局、仮名・池田亮一）、高野広海（？-2008、嶺南大学、北京機関、北京放送局、仮名・関千里）などである。

本論文は、「満洲」（以下かっこ略）に暮らした左翼日本人が、日本の敗戦に伴い、いかに中国共産党（以下、中共と略記）の日本人工作に関わることとなったのか、その経緯の解明を目指すものである。具体的には、合作社（北満型、浜江コース）事件関係者や満鉄調査部事件関係者、満洲映画協会（満映）関係者が、戦後の長春・瀋陽においていかなる活動を展開したのか、その動向を追う。ただ、このテーマに関しては、彼らの足跡を明確に把握できる一次史料が確認できず、主に当事者の後の回想録に依拠することとする。中国からの引揚者は帰国時にメモ・日記類の持ち出しは許されず、回想は引揚後年月を経て執筆されたため、間違いも多々見られる。また同一の出来事に対しても、それぞれの回想によって異なる記載がなされるなど、事実の確定が難しい。そこで、やや煩雑にはなるが、それぞれの回想をまず併記して、相互に比較検討し、その中から事実を浮かび上がらせるという方法を取る。また、多くの日本人の戦後東北での足跡を歴史に留めるため、諸回想録に登場した人物名は極力記載する。

満洲在住の人々以外にも、戦後東北で中共に協力した日本人としては、華北・華中で兵士・軍属などとして活動していたが中共軍に捕虜となり、延安などでの思想教育を経て「反戦兵士」となった「日本人民解放連盟」の一団がいた。彼らは残留日本人を指導する立場から民族幹事と呼ばれた。彼ら民族幹事は「外来派」と呼ばれ、「現地派」の在満日本人の人々と協力して日本人工作にあたった。ただ、両派の対立の局面も見られた（飯塚③）。本稿では、彼ら「日本人反戦兵士」がいかにして東北で活動することになったのか、その経緯も追いたい。

飯塚靖の研究

①回想記編集：国谷哲資「激動中国に青春を生きる―留用中国で学んだ人生観―」（『拓蹊』第２号、2015年７月）

②飯塚靖「戦後中国東北地区における日本人留用技術者の諸相―資料『中共事情』より探る― 」（大

阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』第20号、2017年）

③飯塚靖「ハルビンにおける残留日本人と民族幹事―石川正義の逮捕・投獄と死―」（梅村卓・大野太幹・泉谷陽子編『満洲の戦後』アジア遊学第225号、勉誠出版、2018年）

④回想記編集：国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史―」（『アジア社会文化研究』第20号、2019年3月）

⑤飯塚靖「解題：国谷哲資「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史―」（『アジア社会文化研究』第20号、2019年3月）

⑥飯塚靖「日本人地質技術者の戦後『満洲』での留用」（『下関市立大学論集』第63巻第2号、2019年9月）

⑦飯塚靖「戦後中国長期残留者の軌跡と記憶」（『2019年度大学研究助成アジア歴史研究報告書』公益財団法人JFE21世紀財団、2020年3月）

⑧飯塚靖「1960年代北京在住日本人の一人として―山本勝司氏に聞く―」（『下関市立大学論集』第64巻第2号、2020年9月）

2. 敗戦時、満洲の左翼日本人

諸回想録の検討から、戦後の長春・瀋陽で中共に協力して活動した左翼日本人として、合作社事件関係者と満鉄調査部事件関係者、及び満洲映画協会（満映）関係者の存在が確認できる。

まず、合作社事件で有罪となり奉天第二監獄に服役し、8月末にソ連軍によって釈放された人々がおり、情野（せいの）義秀、岩間義人、井上林、進藤甚四郎、田中治、小松七郎、塙正（作家の塙英夫）、岩船省三の8人である（大西1980、116頁）。

次に、満鉄調査部事件関係者であるが、1945年5月、新京法院の判決で有罪となるが、執行猶予で保釈された人々であり、渡辺雄二、吉植悟、和田耕作、野間清、鈴木小兵衛、下條英男、石田精一、横川次郎、米山雄治、稲葉四郎、狭間源三、具島兼三郎、吉原次郎、平野蕃、石川正義、石堂清倫、石田七郎、松岡瑞雄、三輪武、野々村一雄の20人である（野々村1986、379頁）。

満映では左翼転向者でも能力があれば任用するとの甘粕正彦理事長の意を受けて、多くの左翼前歴者が集められていた。すなわち、大塚有章（仮名・毛利英一）、三村亮一、仁保芳男、北川鉄夫、中村敬二などである。

その他、首都新京には政府機関、協和会、マスコミなどにも多くの元日本共産党員、左翼運動経験者、左翼知識人がおり、日本敗戦を契機に新たな運動を模索した。すなわち、淡徳三郎、山田清三郎、菅沼不二男（満洲国通信社）、福田正義（『満洲日報』記者）、矢島直一（協和会中央本部図書室）、松岡二十世（協和会中央本部文化部次長、満映嘱託として敗戦）、斉藤慎一（合作社事件で検挙）、大塚譲三郎（浜江省公署財務科長、満洲国国務院総務庁統計処資源調査科長、合作社事件で検挙）などである。

満鉄調査部事件で有罪となった人々は保釈後すべて新京に住んだのではなく、同地を離れた者も多い。彼らの敗戦前後の状況は次の通りである。野々村一雄は、1944年12月に奉天第二監獄から新京監獄に移され、45年1月のはじめ3回の単独公判を終わり保釈された。保釈後には大連に戻ったが、同年6月満洲電業奉天支社に就職した（野々村1986、367-370、378、385頁）。石堂清倫の保釈は44年12月末であり、何名かの調べの終わった者と一緒であった。45年5月1日に新京法院で判決があり、5月17日に召集を受けた（石堂1986、268-270頁）。石堂清倫、石田七郎、渡辺雄二の3名は釈放と同時に軍に召集され、渡辺は興安嶺山脈でソ連軍との交戦中に戦死した（草柳1979下巻、337頁）。

上記の人々の中で比較的詳細な回想録を残しているのは、小松七郎、進藤甚四郎、和田耕作、山田清三郎、淡徳三郎、大塚有章である。また、塙英夫の小説『背教徒』は自身の実体験を基に書かれたものと思われ、各種回想と人物や事実で符合する部分が多く、本論でも参照したい。ここで彼らの履歴を確認しよう。

小松七郎（1906-1984）、千葉市生まれ、1924年千葉中学卒、小学校教員を経て日本大学夜間部に進み、学生運動をしながら全国農民組合（全農）に参加し、全農総本部書記となる。31年共産党に入党し、反帝同盟大阪地方委員会責任者として活動。同年京阪弾圧事件で逮捕され、35年12月末まで受刑。出獄後渡満し浜江省農事合作社連合会に勤務する。41年11月憲兵隊に逮捕される。45年8月末に解放され

ると、中共東北局と連絡して在満日本人民主化と難民救済、引揚促進に努力し、在満日本人民主連盟、在華日本人共産主義者同盟の責任者となって活動する。47年2月帰国し、共産党に入党して千葉県下で活躍。同党県委員長、関東地方委員を歴任、のち国民救援会千葉県本部顧問（『近代日本社会運動史人物大事典』日外アソシエーツ、1997年、2巻、630、631頁、『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年、1057頁）。

進藤甚四郎（1911-？）、青森県生まれ、高等小学校卒、1927年頃より共産主義に共鳴し、32年8月共産党に入党、全農青森県連合会黒石出張所事務所常任書記となり、同時に機関紙『赤旗』やアジビラの配布など党活動を行う。32年11月黒石警察署により検挙取調べを受けるが逃走、その後逮捕。33年11月青森地方裁判所において治安維持法違反により懲役4年の判決。38年渡満し、浜江省海倫県農事合作社に就職。41年11月に検挙され、無期懲役刑で奉天の第二監獄に投獄。引揚後は築地中央市場で水産物仲卸商、51年から74年まで全商連事務局長、以後全商連副会長（関東憲兵隊司令部1969、451頁、進藤1978）。

和田耕作（1907-2006）、高知県生まれ、1927年京都帝国大学経済学部に入学し、社会科学研究会にて左翼運動に参加。28年3月「3・15事件」における京都帝大社研への弾圧に連座（不起訴処分）。その後、社研の再建活動に従事し、河上肇教授追放反対闘争をはじめとした合法舞台で活躍し、非合法面での活動には携わらなかった。30年3月京都帝大卒業、同年電車顛覆犯隠匿容疑で逮捕されるが、兵役のため起訴猶予となり松山連隊に入隊。軍隊内生活の体験により、思想的に民族的・国家的ものへと傾斜し、左翼運動から転向した。除隊後、32年京都市役所社会課勤務。34年5月満鉄経済調査会に嘱託として入社し、35年4月には正社員となり大連で勤務。37年6月企画庁（後の企画院）副調査官、38年10月東亜研究所第三部支那経済班主事。41年4月企画院事件で検挙されたが、42年2月に獄中応召でフィリピン戦場に派遣。43年4月満鉄調査部事件で逮捕・投獄。45年11月ソ連軍に拘束され、中央アジア（アルマティ、カラガンダ）に抑留され、49年10月帰国。帰国後、日本フェビアン研究所事務局長、60年民主社会主義研究会議事務局長、民社党の結成に参加。67年、衆議院議員（民社党）に当選、連続6期在職（和田1964、和田2001、『近代日本社会運動史人物大事典』4巻、995、996頁）。

山田清三郎（1896-1987）、京都市生まれ、小学校を6年で中退、さまざまな労働に従事した後、1918年上京。22年、伊藤忞と共に『新興文学』を創刊し、以来プロレタリア文学運動に投じ、『文芸戦線』『前衛』『戦旗』の編集にたずさわる。31年共産党に入党、同年2月治安維持法違反で検挙、34年8月～38年2月同法及び不敬罪で懲役、転向。39年渡満し、満洲新聞社に入社、後に文化部長となる。満洲文芸家協会委員長兼書記長などを歴任し、42年11月、43年8月の第一回、第二回大東亜文学者大会（東京）、44年11月の第三回大東亜文学者大会（南京）への出席。敗戦時は、満洲芸文協会文芸局長兼文学部長の職にあった。45年11月より中央アジア・シベリアで収容所生活をし、50年4月帰国。56年共産党に再入党、57－58年『転向記』（3巻）刊行。松川事件、白鳥事件などの救援活動で活躍（『近代日本社会運動史人物大事典』4巻、740、741頁、『20世紀日本人名事典』2650頁、山田1957、松岡2013、786、787頁）。

淡徳三郎（1901-1977）、大阪市生まれ、1919年第三高等学校文科丙類入学、22年京都帝国大学文学部入学、在学中漸次マルクス主義に没入し、岩田義道などと共に「伍民会」（後に京大社会科学研究会）を結成。25年3月京大卒業、26年1月京都学連事件に連座し、同年6月まで京都刑務所に収監される。27年12月共産党に入党し、野坂参三主査の産業労働調査所において雑誌『インタナショナル』の編集に協力し、同時に京浜地区で労働運動に従事。28年5月「3・15事件」に連座して検挙され、拘置1年半後、実践運動から身を引き学術研究に没頭すると声明して保釈となる。34年控訴審で懲役2年、執行猶予4年の判決を受ける。35年3月、思想犯保護団体「大孝塾」の海外派遣員としてフランスに渡り、在仏日本人向けの小新聞『日仏通信』を発行するなどして生計を立てた。44年8月、連合国軍によるパリ占領の直前にベルリンへ移動。45年5月、

シベリア鉄道を経由して満洲に移動し、帰国せずに新京で暮らす。戦後ソ連に抑留され、48年8月帰国。52年衆院選に立候補したが落選。一方、平和擁護日本委員会常任委員、アジア・アフリカ連帯委員会事務局長、「ジューヌ・アフリカ」誌日本支局代表などを務めた（『近代日本社会運動史人物大事典』3巻、395頁、『20世紀日本人名事典』1613、1614頁、淡徳三郎追悼録刊行会1980「淡徳三郎の生涯一年譜」）。

大塚有章（1897-1979）、山口県の旧岩国藩下級武士の家に生まれる。父は会津の戦いで負傷してからは、明治政府の内務省官吏と奈良県令をしていたが、郷里に戻り吉川家の家令を務めた。河上肇の義弟。早稲田大学卒業後、1920年満鉄に就職、後に藤本ビルブローカー銀行に勤務。23年山口県下有数の大地主で衆議院議員も務めた国光五郎の長女英子と結婚し、国光家の養子となる。28年第1回普通選挙では、大山郁夫を支援し香川県で活躍。これを契機に銀行を辞め、養家とも義絶し、実践活動に入る。京都での労働運動で活躍し、30年8月には京都府労働組合総評議会の常任書記に就任。32年1月に上京し、同年3月共産党入党。同年10月共産党の活動資金獲得のために大森銀行ギャング事件を起こし、33年1月逮捕・投獄され、34年11月懲役10年の判決。42年4月に満期出獄し、同年6月満映入社、巡回放映課長、厚生課長を勤める。敗戦後は満映の東北電影公司への再編に参加し、東北建設青年突撃隊の組織、在長春日本人民主連盟委員長などとして中共に協力。46年9月鶴崗炭鉱に派遣され、同炭鉱日本人労働組合の委員長となり、東北建設突撃隊を組織する。48年12月瀋陽の東北人民政府工業部日籍職工課長となり、49年2月鞍山鋼鉄公司に転属。50年には、東北人民政府日本人管理委員会の宜教課長となり、『民主新聞』社副社長を兼務。53年以降は、中国政府が指導した日本人帰国支援の仕事に従事。56年8月天津から帰国し、共産党に再入党、日中友好協会理事、同大阪府理事長となった。66年共産党を除名され、毛沢東思想研究会を設立、日中友好協会分裂では正統本部に所属し、毛沢東思想学院長を務めながら、執筆活動を続けた（『近代日本社会運動史人物大事典』1巻、633、634頁、中国中日関係史学会2003、『未完の旅路』刊行委員会1980「大塚有章略年譜」）。

塙英夫（1912-1988）、東京府生まれ、本名・塙正。千葉県立匝嵯中学校を経て第一高等学校に進学するが、伊藤律らと非合法政治活動に加わり、1931年校友会雑誌に発表した文章が問題となり検挙され、32年2月退学。『赤旗』編集局で働くが、数度の検挙を経て転向。一高での知己の佐藤大四郎の誘いで37年渡満し、合作社運動に従事。41年、「アルカリ地帯」が『中央公論』懸賞小説に当選し掲載される。同年10月、合作社事件で検挙され奉天に在獄。敗戦後、引揚の手助けをして46年引揚。戦後は日教組関係の仕事に従事した後、作家に専念した。53年、引揚の経験を描いた『背教徒』で芥川賞候補、同年「すべて世はこともなし」で再度候補（関東憲兵隊司令部1969、452頁、塙1956著者略歴、『20世紀日本人名事典』2018頁）。

ここでその他の人物についても略歴を紹介する。

北川鉄夫（1907-1992）、東京帝国大学中退、日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）を岩崎昶らと結成。1942年夏渡満し、満映に勤務。46年8月、葫蘆島より引揚。戦後は東京部落問題研究会副会長（北川1975、岸・石井2015、156頁）。

中村敬二、京都生まれ、全日本無産者芸術連盟（ナップ）とプロキノに参加、1942年シナリオライターとして満映に入社、戦後は東北電影公司に参加し、鶴崗炭鉱では日本人文化活動の指導者となったが、50年に中国で病没した（秦2019、358頁）。

斉藤慎一、東京都出身、1931年頃より劇団「前進」に加わり共産党のシンパ活動に従事、浜江省興農合作社職員、合作社事件当時32歳、起訴猶予となる（関東憲兵隊司令部1969、461、537頁）。出獄後には満洲新聞社出版部に勤務し、満洲芸文協会に移る（山田1957、165頁）。

岩船省三、東京都生まれ、早稲田高等学院独文科中退、1932年5月共産党入党、34年2月東京地裁にて治安維持法違反により懲役4年となる（関東憲兵隊司令部1969、453頁）。小菅刑務所服役中にキリスト教に入信し、戦後瀋陽では奉天教会牧師の庇護の下で暮らし、46年7月引揚（岩船1952）。

3. 敗戦直後の長春・瀋陽（1945年8月～11月）

(1) 合作社事件関係者の出獄と活動開始

進藤甚四郎は無期懲役刑で奉天の外国人監獄（日本人・朝鮮人などを収監するための奉天第二監獄―飯塚、これは筆者による注記であり、以下同様）に服役中であったが、敗戦後の1945年8月22日、合作社事件関係者が全員解放された。すなわち、同志の１人に少しロシア語のできる者がおり、ソ連軍と監獄役人との交渉の通訳に当たったので、彼は日本人の政治犯もいることを告げ、予定より早く出獄することができたとしている。釈放後、進藤は2人の仲間と共に妻たちのいる新京（長春―飯塚）に行った（進藤1978、154-157頁）。なお、奉天・新京は、敗戦後は瀋陽・長春と改称されたが、日本人の回想では戦前の感覚から奉天・新京と表記される場合が多い。以下では、戦後の両市の呼称については、回想の記述に関わらず瀋陽・長春で統一する。

山田清三郎の回想では、進藤甚四郎と清野清は、北満型合作社事件で奉天第二監獄に服役していたが、8月30日にソビエト軍によって井上林、岩間義人、小松七郎、塙盈政（塙正―飯塚）らと一緒に釈放され、瀋陽に残った井上、岩間、小松らと別れて長春に来ていたとされる（山田1957、208頁）。

塙英夫の小説『背教徒』によれば、主人公・佐伯はロシア語が少しでき、ソ連軍将校の通訳をした。佐伯はソ連軍将校に、ここには自分達8人のコミュニストがおり、早く出獄させて欲しいと訴えたが、ソ連軍将校はそれを拒否した。しかし、島本は、先に釈放された朝鮮人思想犯に、出獄後自分たちの釈放も働き掛けて欲しいと依頼していた。こうした理由からか、佐伯達8人は予想より早く8月末に出獄できた。妻が長春で待つ佐伯は、同じく妻が長春にいる島本と共に同地に向かった。同行したのは、清川であり、彼は建築技師として合作社の建物の建造を担当したが、私腹を肥やし、佐伯達を憲兵に売り渡した人物であった（塙1953、9-41頁）。このように進藤、山田の回想と塙の小説は多くの点で符合し、小説中の主人公・佐伯が塙正、島本が進藤甚四郎と考えられる。さらに清川（山田回想では清野清）は、情野（せいの）義秀と推定できる。すなわち、情野は山形県立工業高校建築科卒であり、合作社関係者の大量逮捕は、公金横領事件で逮捕された情野義秀が、仲間が共産主義運動をしていると供述したことを契機としていた（関東憲兵隊司令部1969、450頁、「合作社事件」研究会2009、解説9頁）。このことから、長春に移動した3人とは塙、進藤、情野とみて間違いない。

進藤の回想に戻ろう。彼は長春では、身体を休める暇もなく、日本人の民主的組織づくりや、難民救済活動の取り組みを開始した。ただ、ソ連軍から、これは「反ソ」的な動きではないかと誤解された。それは進藤たちの組織に、かつて独ソ戦時代に、独軍の占領地フランスのパリで活躍した知名人も参加したこと、最初に進藤たちの難民救済活動を援助してくれたソ連軍政治部の将校などの帰国、それに何よりも言葉の通じないことなどが重なり、主だった10数人が、ソ連軍の憲兵隊に捕まるということになったのである。進藤たちは2週間ほどで釈放されたが、友人の幾人かは捕虜と一緒にシベリアに連れて行かれてしまった。連行されて行った人たちのなかには、帰国してから反ソ的、反共的な国会議員になった人もいた（進藤1978、158-160頁）。

この独軍占領地パリで活躍した知名人とは淡徳三郎であり、シベリアに抑留され帰国後国会議員になった人物は和田耕作であろう。この両名については、本人たちの回想録も利用して、以下で詳しく動向を検証しよう。

(2) 長春での左翼日本人グループの始動

ここでは和田耕作を中心とした満鉄調査部事件関係者の動きを追う。フィリピン戦場にいた和田は、1943年4月満鉄調査部事件により逮捕され、満洲に送還された。奉天監獄に収監中の44年1月発疹チフスに罹患して、奉天の伝染病院に入院し、退院後に保釈となり病気療養を続けた。病状回復後に新京に移り、日満木工株式会社という小規模な民間企業に勤務した。そして45年6月（正しくは5月―飯塚）の最終審で執行猶予となり、妻と共に新京で暮らしていた（和田2001、186-220頁）。敗戦後、長春にはソ連軍が進駐し、同軍隊による暴行・略奪が繰り広げられ、さらに開拓団を中心とする難民が流入し飢えと病気により死者が続出するなど、長春の日本人は悲惨な状況にあった（和田2001、221-233頁）。

和田は日本人の窮状打開のためにはソ連軍との交

渉が欠かせないと考えて、ソ連軍との接触の方途を探った。彼は当時の心境を、日本の特高や憲兵が自身を強引に共産主義者に仕立てようとしたのは拒否したが、敗戦後の混乱に直面し、日本人救済のためには「本物の共産主義者となってもよい」と考えたと述懐している。そこで和田は、同じく満鉄調査部事件で執行猶予となった三輪武[1]と野間清[2]を説得して、3人で行動を共にすることとした。まずは満洲国通信社の菅沼富士雄（菅沼不二男―飯塚）と相談して、菅沼を通じて満洲国通信社の監督官であるソ連軍大尉と会談した（和田 2001、233-234 頁）。敗戦後、満洲国通信社は、ソ連軍の監督下にあり、日本人従業員は旧来の態勢で仕事を続けていた。その中でも菅沼は誠実であり英語も話せるので監督官の信頼を得ていた（和田 1964、92 頁）。

この監督官に対して、和田たちはソ連軍と日本人との理解を深めるために協力したいと申し入れた。そしてこの監督官の仲介により、彼らはバルビル少佐との面談に成功した。同少佐は日本語が達者で、日本人を母とする混血児とのことであり、和田などの主張に理解を示し、支援者となった。その後、同少佐の紹介で、和田など4人はソ連軍中佐の肩章をつけた日本人に会った。その中佐は、パリッとした軍服を着て長靴をはき、細面で貴公子然とし、縁なし眼鏡の奥に柔和な目が笑みを含んでいた。そして3時間に及ぶ対談の中で、日本の天皇制やアメリカ占領軍の民主的改革の問題などが話し合われた。和田はこの人物は延安にいた野坂参三ではないかと考えたが、後に淡徳三郎に話すと淡も野坂に間違いないとのことであった（和田 2001、234-237 頁）。

この日本人中佐は和田などに次のような任務を提示した。①新京を中心に民主的グループを組織すること、②とりあえずニュースを中心とする新聞を出すこと、③難民救済を積極的に行うこと、難民救済については日本人民団組織の民主化が必要なこと[3]。こうした指示に対して和田などは賛意を示し、その場で4人の役割を決めた。民主的グループの組織は全員であたり、ニュース新聞は菅沼を中心に三輪と野間が協力する、難民救済は主として和田が担当し、皆で協力するとした。そして日本人中佐はバルビル少佐に、ソ連軍司令部への連絡と、和田などの活動のために夜間通行証を含めたソ連軍公務員としての証明書を出すことを命じた。こうして和田などは、ソ連軍公務員として自由に活動できる立場となったのである（和田 2001、238-239 頁）。和田の別の回想では、この日本人中佐との会談を9月下旬としている。また、しばらくたってバルビル少佐から、瀋陽に行って延安から来た日本人数人と連絡をとって欲しいと要請され、同地に行ったが、延安からの日本人はまだ到着していなかったとしている（和田 1984、54-57 頁）。

こうして和田などは、日本人向けの『新京ニュース』を発行した。ただその紙面はわずか半頁大の小さなものであり、また赤軍司令部による厳重な検閲がなされた。和田、三輪、野間の3名に菅沼が協力しての発行であったが、3名での編集は第7号までで、その後は菅沼と同じ満洲国通信社のC君、満日（満洲日報）のM君等のエキスパートがこれにあたったとしている（和田 1964、96-98 頁）。

和田は本当に野坂参三と長春において面談したのであろうか。以下でその真偽を探ろう。また、延安からの日本人たちとは誰なのか。その疑問にも迫る。

(3) 野坂参三のソ連訪問と延安日本労農学校学生の東北入り

①長春の野坂参三

野坂参三の東北を経由してのソ連行きについては、彼の自伝などでは秘匿されていた。その事実を明らかにしたのは、野坂の訪ソに同行した香川孝志である（香川・前田 1984）。そして和田春樹の野坂参三研究の中では、香川の回想やソ連及び中国の文書を用いてその詳細が明らかにされている（和田春樹 1996）。

香川の回想によれば、野坂は香川など3人を随行員として、1945 年9月初旬、アメリカ軍輸送機で延安から張家口まで行き、その後ソ連軍機に乗り換えて、瀋陽を経て長春に到着したとする。長春のソ連軍司令部にて一行には、ソ連軍将校の軍装が渡され、それに着替えた。肩章のついた軍服、皮の長靴、腰に拳銃を下げ、野坂はソ連軍中佐、随行の3人は少佐となった。長春には1カ月ほど滞在して、その後ソ連軍機で長春を立ち、シベリア鉄道に乗り換えてモスクワに着いた。野坂たち一行はモスクワには1週間ほど滞在し、瀋陽、朝鮮を経由して釜山から引揚船に乗り、46 年1月 12 日博多港に上陸した（香川・前田 1984、126-130 頁）。

一方、和田春樹の研究によれば、野坂の随行員は森健（本名・吉積清）、梅田照文（本名・香川孝志）、山田一郎（本名・佐藤猛夫）の3人であった。一行の延安出立は1945年9月9日であり、同日中に霊邱に到着し、そこから徒歩、騎馬、トラック、汽車に乗り約1週間かけて張家口に着き、同地で日本人居留民の工作をしながら一週間滞在した後、ソ連軍機で瀋陽に飛び、その翌日に長春に飛んだとしている。長春には2週間ほど滞在し、日本人居留民のための活動を行なった。長春からはソ連軍機によりイルクーツクまで飛び、そこからシベリア鉄道でモスクワに向かい、モスクワには10月上旬に到着した（和田春樹1996、126-128頁）。

この和田春樹の研究によれば、1945年9月下旬に野坂が長春に滞在していたことはほぼ確実であり、和田耕作など4名との面談がなされた可能性も高い。野坂がソ連軍中佐の軍装であったとの香川の証言は、和田耕作の回想とも符合する。

モスクワで赤軍参謀本部総諜報局の受け入れとなった野坂は、同局に要望を出した。要望は主に、日本共産党を戦後いかに再組織すべきか、将来の日本政府はいかなる性格となり日本共産党はその政府にどのような態度を取るべきか、などについてのソ連側の見解を求めるものであった。同時に野坂は個人的な要望として、「満洲、南サハリン、朝鮮にいる日本人のために『民主日本をめざそう』という政治工作を行うことが必要である。このために人民解放連盟のメンバーを活用する」べきであると主張している（和田春樹1996、128-130頁）。この「人民解放連盟」とはすなわち、華北・華中の戦場で中共軍の捕虜となり、思想教育を経て同軍に協力して反戦活動を行なっていた日本兵の集団である。39年11月、山西省の中共地区で「めざまし連盟」（後に「日本人覚醒連盟」）が結成され、日本兵などによる反戦活動が開始された。40年3月に野坂が延安に入ると、日本兵捕虜の教育を彼が担当することとなり、同年5月には「在華日本人反戦同盟延安支部」（本部は重慶）が設立され、11月には延安に日本労農学校（校長・野坂参三）が開設された。そして42年8月には覚醒連盟と反戦同盟を統一し、「在華日本人反戦同盟華北連合会」が結成された。44年2月、この「在華日本人反戦同盟」が、在中国の兵士・居留民だけでなく日本国内の人々にも働きかけていくために「日本人民解放連盟」へと発展的に解消することが決定された。なお、野坂は42年6月、反戦兵士の中から積極的な活動家を選んで「在華日本共産主義者同盟」をも組織している（和田春樹1996、89-104頁）。

②日本人反戦兵士の東北入り

上記のように野坂は、満洲などの日本人工作のために延安の「日本人民解放連盟」メンバーの利用も企図しており、彼らとの連絡のために和田は瀋陽に派遣されたものであろう。それでは延安日本人はどのような経路で東北に入ったのか。秋山良照の回想によれば、延安の日本労農学校の日本人は約250数名であったが、健康上の理由から50名は後から出発することとなり（総責任者は茂田江純）、総勢200名弱で帰国のため満洲に向けて旅立った。出発は9月18日であり、大部分が徒歩での移動であり、一部区間のみ汽車を利用した。行軍は先発した岡野進（野坂参三）と無線機で連絡を取りながら続けられ、秋山は無線の担当であった。岡野からの指示はすなわち、彼と行動を共にしている八路軍参謀部と李初梨[4]からの指令ということであった。部隊は新民（瀋陽郊外）に到着したが、同地には李初梨、井上林が迎えに来ていた。瀋陽はすでに国民党に占領されていたので、瀋陽には入れず、本溪湖（現本溪市）に向かい、11月中旬に同地に着いた。同地で岡野からの以下の指示があった。すなわち、秋山良照と高山進（本名・川田好長）が盟員を引率し、一刻も早く平壌に向かうこと、杉本一夫（本名・前田光繁）、中小路静夫（本名・中村善太郎）、和田真一（本名・山室茂）、大山光義（本名・戸倉一雄）らは本溪湖に残り、日本人居留民対策にあたること。こうして秋山などは、朝鮮軍の援助を受け、北朝鮮を経由して帰国し、1946年3月に日本に到着した（秋山1978、217-225頁、秋山1977、19頁）。

敗戦時、山西省西北部の日本労農学校晋西北分校にいた川田好長は、同校の日本人15人ほどと共に、延安より移動中の労農学校の部隊に合流した。この川田の回想では、本溪湖において李初梨より、中村善太郎、前田光繁らは残留し、私（川田）、白鳥、中島らはすぐ日本に帰れとの指示を受けたとする。また川田は、当時は誰もが帰国を望んでいたので、残留組は残念がったとしている。こうして川田など

は、北朝鮮を経由して1946年3月に帰国した（「川田好長（通名・春田好夫、高山進）さんへのインタビュー」、藤原・姫田1999、159-161頁）。

秋山の回想のように、日本人労農学校の部隊は10月上旬にはおそらく新民にも到着しておらず、瀋陽で会えなかったとする和田の回想と符合する。ともかくも、秋山と川田の回想のように、野坂参三あるいは李初梨の指示により、多くの「日本人民解放連盟」メンバーが東北に残留し日本人工作に従事することとなったのである。

③日本人反戦兵士の活動開始

それでは戦後東北に残留した「日本人民解放連盟」メンバーは、その後どのような足跡をたどったのであろうか。残念ながら彼らは東北での体験を詳しくは語っておらず、詳細は不明である。中村善太郎（通名・中小路静夫）の回想では、本渓湖では中村と和田で日本人民学校をつくり、杉本は飛行隊に行き、大山は公安局で活動したとしている（藤原・姫田1999、131頁）。前田光繁は、通化に行き林弥一郎航空部隊隊員の教育に携わり、中共軍の航空隊の創設に協力したと回想している（藤原・姫田1999、111頁）。すなわち、前田は李初梨からの指示を受け、1945年12月中旬に通化に行き、東北民主連軍通化後方司令部より、航空総隊政治部副主任兼大隊政治委員に任命されたのである（前田1993、105、106頁）。

ここでは安東（現丹東市）の日本人労農学校の学生であった水野正昭の回想により、その足跡の一端を探ろう。石川県金沢市で育ち旧制商業学校を卒業した水野は、1944年満洲の国際運輸会社に就職し、安東支店に配属された。敗戦時、水野は徴兵されて通化にいたが、すぐに安東に戻った。45年11月には安東に八路軍が入り、中共側が国際運輸会社を接収し、失職した水野は野菜の販売で食いつないでいた。水野は46年のメーデーで、一重の黒の制服を着た日本人青少年が「赤旗の歌」を歌いながら行進するのを目撃した。彼らが日本人労農学校の生徒であることを知った水野は、同校に入学した。同校は元々、杉本一夫や和田真一らが本渓市の宮野原にて開設したものであり、学生の多くは水野と同郷の石川県出身の満蒙開拓青少年義勇隊員であった。その後学校は、国府軍の進攻に遇い、安東まで撤退したものである。46年6月頃には国府軍の安東進攻により、労農学校は通化に向けて移動した。学生は60人、責任者は和田真一であった。通化では杉本一夫による歓迎を受け、大宴会が開かれた。その後労農学校の一団は、延吉市を経由して哈爾濵に到着した。46年9月頃、哈爾濵では日本人の引揚が始まっており、労農学校の生徒は全員帰国したが、水野は和田真一の説得で残された。彼は和田と一緒に牡丹江の航空学校（林弥一郎の航空部隊）に行き、政治部日工科文書（日本人工作科書記）の任に就いた。日工科長は和田真一であったが、これは通化から杉本一夫が来るまでとの約束であり、航空学校が移転した東安（黒龍江省密山）で両者の引継ぎがなされた。その後、水野は和田と共に佳木斯の総後勤部総政治部民族科に移動した[5)]。

上記の水野の回想のように、本渓湖に残った「日本人民解放連盟」メンバーは同地で労農学校をつくり日本人教育に乗り出し、その際に学生となったのは満蒙開拓青少年義勇隊の若者達だったのである。水野の回想では、労農学校の生徒は水野を除き全員帰国したとするが、せっかく養成した貴重な人材を本当に全員帰国させたかどうかは疑問が残る。

以上のように、延安の労農学校の日本人も多数東北に入り、在満の日本人左翼グループと並んで、留用・残留日本人の指導幹部として各地で活動することとなるのである。

(4) 長春での左翼日本人グループの糾合

①山田清三郎の回想

山田清三郎は保釈後の1939年に渡満し、敗戦時には甘粕正彦が会長を務める満洲芸文協会の文芸局長兼文学部長として、満洲国の芸文（文学、演芸、映画、美術、音楽、舞踊などの総称）統制のための枢要な職務に就いていた（山田1957、164頁）。山田は、「大東亜戦争」を「米英を撃滅し、駆逐し、東亜の諸民族を彼らから解放するという夢想」を自身の戦争協力の拠り所としてきたが、ソ連軍の満洲進攻が報道されると、転向以来の自身の過去に否定的な思いを走らせたとしている（山田1957、174頁）。

こうして山田は転向者としての煩悶を抱え、乳がんを患う妻の病状を気にしながら、妻からの激励を受け、長春での左翼日本人グループの運動に参加し

て行った。彼の回想では、1945年9月初めに「在長春日本人民主主義者同盟」準備会といった動きが起こり、顔ぶれは、淡徳三郎、山田、鈴木小兵衛、矢島直一、松岡二十世[6]、進藤甚四郎、清野清（情野義秀―飯塚）、斉藤慎一、菅沼一（菅沼不二男―飯塚）、和田耕作、三輪武、三村亮一などとされる。山田が淡と会ったことから、順次その他のものと連絡がつき、山田の家や淡の寄食さきの白山住宅、さらに旧協和会住宅の矢島の家その他で会合をもったとしている（山田1957、207、208頁）。

矢島直一は終戦まで協和会中央本部の図書室で働いていた「本の虫」であり、明治学院の出身で、学生運動をやって検挙されていた。菅沼、和田、三輪の3人は日本語新聞『情報』の編集に携わっており、それは満洲新聞社の工場で印刷されていた（山田1957、208頁）。淡徳三郎は1945年5月半ばから新京に来ており、ベルリンが陥落して、日本人が総引揚げの時にモスクワ経由でシベリアを通って満洲に入り、日本への帰国を見合わせて新京に滞在していたものである。なお山田は、自分たちが連絡を取ったソ連軍の政治部関係将校を「バル・ビル少佐」としているが、同少佐に関する具体的記述はなされていない（山田1957、211頁）。

旧知の仲である中国人作家・古丁[7]は「東北作家連盟」をつくり、新しく創刊された『光明日報』（中共系新聞―飯塚）の仕事に参加していた。古丁は山田などのグループに張東籬というまだ30歳前の青年を紹介した。彼は一見質朴そうな青年で、その陽灼けした顔は東奔西走の忙しさを語っていた（山田1957、212、213頁）。この張東籬とは、中共地下党員の趙東黎[8]であると考えられる。菅沼不二男も長春の中ソ友好協会で趙という人物に会っている。菅沼の回想では、趙は30歳ほどの年齢で、終戦の前々年から商人になりすまして長春に入り込んでいた中共党員で、その後中共軍が長春から撤退してからは付近の農村で活動し、解放後にはまた長春に戻ったとしている（菅沼1962、172頁）。

日本敗戦後の長春では、ソ連軍は国民政府と締結した「中ソ友好同盟条約」に拘束され、中共側を公然とは支援できなかった。しかし、東北抗日聯軍で活躍しシベリアに逃れていた周保中がソ連軍と共に長春に入り、ソ連軍駐長春衛戍司令部副司令を務めており、中共の活動はある程度容認された。中共地下党員の申東黎、傅根深、趙東黎などが積極的に活動し、党組織を拡大し、1945年9月下旬には申東黎と徐慎が瀋陽に行き、同地の中共中央東北局に活動報告を行っている。そして9月30日には東北局の指示に基づき、周保中の指導下で中共長春特別市委員会を設立し、申東黎を書記、徐慎、趙東黎、傅根深、劉健民を委員とした[9]。この趙東黎と劉健民は満映にも乗り込み、満映を東北電影公司（以下、東影と略記）に改組して（10月1日）、中共の影響下に収めている[10]。長春の日本人左翼グループは、この趙東黎と連絡を取ったものであろう。

山田の回想に戻ろう。1945年11月7日、長春で十月社会主義革命28周年記念式典と祝賀園遊会が開催され、山田も在長春日本人居留民団の一員としてこれに参加した。居留民団の事務所は旧三中井百貨店に置かれ、山田などの仲間である進藤甚四郎、清野清らが働いていた。記念式典には旧知の北川鉄夫が東影の一団として参加していた（山田1957、216-220頁）。山田は、東影には、北川鉄夫、大塚有章、石井照夫（満映企画委員会）、中村（中村敬二―飯塚）など仲間が多いとしている（山田1957、223、224頁）。

「在長春日本人民主主義者同盟」は40名からの同志を結合し、11月7日前に（日にちが特定されていない―飯塚）、東影の地下室を会場として総会を開催していた。山田によれば、当時の長春では日本人が40名もの集会を開く場所は他になく、またそのような集会を開くことはできない状況にあった。当時の長春ではソ連官憲による「反ソ・反共分子」の大量検挙が始まっており、居留民団はソ連官憲からの嫌疑を避けるため、日本人のあらゆる集会を禁止していた。そのためにこの総会は秘密裡に開催された。総会では、ソ連軍司令部の「バルジル少佐」から証明書をもらい瀋陽に行き、同地でつくられた「日本人解放同盟」と連携の打ち合わせをしてきた和田耕作の報告があった。和田の報告では、瀋陽の「日本人解放同盟」は、井上林、小松七郎、栗木一夫（労務興国会勤務）などを中心として組織されたものであった。瀋陽ではソ連軍の諒解の下に、11月13日に在東北日本人民大会の開催が予定されていた。そこで、長春からはこの大会に大塚有章と三村亮一を派遣することとした（山田1957、221-224頁）。

後述のように和田の瀋陽への派遣は11月2日から10日までであった。そして和田の長春帰着直後に同盟の第2回総会が東影で開催されたとしている。上記の回想は山田の間違いで、和田の報告があった総会とは第2回目の総会であった可能性が高い。

上記の総会の後、山田の家で同盟の役員会議が開催された。議題は、①日本人難民に関する問題、②ソビエト官憲の「反動・反ソ分子」検挙に関する対応であり、いずれも難しい問題であった。出席者は、淡、和田、三輪、進藤、菅沼、斉藤慎一、山田、その他2、3名であった。当時ソビエト秘密警察による日本人「反動分子」「反ソ・反共分子」の大量検挙が行われており、同盟はこのソ連軍の動きに協力すべきか、特に日本人に対する捜査・告発をすべきか、これが同盟での議論となった。そして、協力すべきではないということで一致した（山田1957、224-226頁）。

②和田耕作の回想

和田耕作によると戦後長春には、和田などの満鉄調査部事件関係者以外に、3つの日本人の民主的なグループが自然につくられつつあった。①満映グループであり、大塚有章、三村起一（三村亮一―飯塚）などの左翼運動前歴者の一団であり、三村は和田の京大社研の一年先輩で旧知の間柄であった。また山田清三郎はこの一団と密接に連絡を取っていた。②淡徳三郎を中心とした満洲国外交部や共和会（協和会―飯塚）職員などの知的な人々の集まりであり、「民主連盟」の結成についてソ連軍司令部に請願を提出しようとしていた。③興農（農事―飯塚）合作社事件関係者であり、新藤甚四郎（進藤甚四郎―飯塚）や花輪（塙正―飯塚）などを中心とする実践的な人々であり、瀋陽の民主グループとも関係を持っており、鈴木小兵衛も参画しているようであった（和田2001、248、249頁）。

和田などのグループと上記3グループは、個人的なルートを通じて連絡ができたが、大同団結を計るために「民主連盟」の結成が実行された。そして、第1回大会が1945年10月下旬に満映（東北電影公司―飯塚）で開催され、出席者は大塚、三村、進藤、花輪、山田、和田、三輪、松岡瑞雄、菅沼など約20名であった。三村を座長にして、各グループの実情が報告され、ソ連軍や中共とも連絡の取れる統一的な組織と活動について検討した。和田は、ソ連軍政治部との接触と『新京ニュース』の発行及び難民救済の実情を報告した。第1回大会決議として、「民主連盟」の結成と日本人民会の民主的な改組、中共協力が決定された。興農合作社グループはすでに中共との連絡もできていたようであり、この会合には中共の吉林省オルグの張東離がオブザーバーとして出席予定であったが、都合で出席できず、代理が出席した。また、大会では近く瀋陽に到着予定である延安の「日本人解放連盟」の人々との連絡のために、和田と進藤の瀋陽派遣も決めた。これは先にバルビル少佐から依頼されていたものであった（和田2001、249、250頁）。この張東離とは前述のように趙東黎であろう。

「民主連盟」強化の見通しもついたので、次に和田は日本人居留民団の改組に動いた。和田、松岡（松岡瑞雄―飯塚）、進藤、さらに満映組の一人を民団中枢に入れることを民団側に要請し、それを認めさせた（和田2001、251頁）[11]。

1945年11月2日、和田と進藤は瀋陽に向かった。中共は瀋陽を完全に握っており、その東北委員会の本拠も同地にあった。瀋陽の同志たちは進藤と同じく合作社事件で奉天監獄につながれていた人々が中心であり、彼らは中共の信頼を得て、着々と瀋陽の日本人を中共に協力させていた。中共の対日本人責任者は外事部長の李（李初梨－飯塚）という人物であり、彼からは日本人技術者が中共へ協力するよう働きかけてもらいたいとの要望を受けた。瀋陽行きの主たる任務であった延安の「日本人解放同盟」の人々との連絡は、彼らがまだ瀋陽に到着しておらず目的を果たせなかった。11月7日のソ連革命記念日には、瀋陽での日本人の民主的組織確立のための大集会が奉天医大の講堂で開催され、和田もそれに参加した（和田2001、254-264頁）[12]。

和田、進藤が長春に戻ったのは11月10日であった。和田はバルビル少佐への報告のためにすぐに満洲国通信社に向かったが、菅沼より同少佐は突然長春を立ちどこに行ったか不明であると知らされた。和田などの活動に支援を与えたバルビル少佐がいなくなったことは大きな痛手となった。長春では第2回の会合が前回同様に満映で開かれた。和田と進藤の報告を中心とし、さらに当面の問題の打ち合わせ

を行い、①日本人民会の急速な改組と全日本人の大衆的な民主的組織の結成、②中共への積極的協力が決定された。同会には張東離（趙東黎―飯塚）も出席し、通訳は文士の胡丁（古丁―飯塚）が務めた。そして張東離からは、反動分子の摘発と隠匿武器の捜索が要請された（和田 2001、265-267 頁、和田 1964、115、116 頁）。

③淡徳三郎・北川鉄夫・横川次郎の回想

淡徳三郎は長春左翼日本人を結集した組織について、次のように述べる。すなわち、長春在住の進歩的な人々を糾合して「在長春日本人民主主義者同盟」なるものを結成した。11 月中頃には約 40 人の同志を有するに至り、会の目的は在満日本人に未来に対する希望を与え、民主主義的な確信を植え付けることであったとしている（淡 1948、159 頁）。

北川鉄夫は、それを「日本人民主同盟」の長春グループとし、満映グループの「同盟」代表には自身がなったとしている。そして 1945 年 11 月 7 日のロシア革命記念日の遊行大会（デモ）には、同盟員がプラカードや赤旗を掲げて参加したとする。小柄な山田三郎が晴々とした顔で参加していたとも回想している（北川 1975、255-257 頁）。

横川次郎は、淡徳三郎、山田清三郎、大塚有章、満鉄調査部事件及び合作社事件で逮捕された人々により、「日本人共産主義同盟」、「民主主義者同盟」などのいくつかの団体が組織されたが、これらの団体の代表 20 数人が集まり、1945 年 11 月 7 日の十月革命記念日に「日本人解放同盟」準備会が組織された。そして大塚有章が委員長となったとしている（横川 1991、110 頁）。

④大塚有章の回想

大塚有章の回想は次の通りである。1945 年 9 月頃、大塚は東北電影公司にて中共党員の張に初めて会った。これは非公開の会合であり、彼から中共の歴史と重要政策の解説を 4 時間ほど聴いた。張は 30 歳を少し出たくらいの逞しい青年であり、一見して軍人だと感じさせる人物であった。11 月に入った頃その張が、「日本人の共産主義者の団体が長春にあるそうだが、その同志たちに私を会わして貰えないだろうか」と持ち掛けてきた。同団体は、旧奉天監獄から出てきた人々がイニシアを取って組織された「在長春日本人共産主義者グループ」であった。11 月の深夜には大塚の自宅で、張も参加してグループの会合が開かれた。ただ当時、ソ連軍長春衛戍司令部は日本人の政治活動を禁止しており、後に共産主義者グループのことがばれて、グループ員の大半が一網打尽に捕らえられ 10 日間ばかり灸をすえられた（大塚 1957、13-15 頁）。大塚の別の回想では次のように述べられている。長春市在住の日本人共産主義者が集まって、非合法で学習グループを結成しようという動きがあった。これに中共は積極的に援助してくれたが、ソ連軍司令部は日本人の集会結社を禁止していたので、非合法活動とした。45 年の暮れに近いころ、「在長春共産主義者グループ」の発会式が、東影の会議室で開催された。メンバーは、合作社事件、満鉄調査局事件などの犠牲者を中心とした 10 数名であった（大塚 1976 第 5 巻、186 頁）。

以上のように大塚の回想では、長春における左翼日本人の組織を「在長春日本人共産主義者グループ」としており、山田清三郎、和田耕作、淡徳三郎、北川鉄夫などの「民主」を冠した組織名とする回想と一致しない。また、組織参加者の氏名も挙げられておらず、参加者の一部のシベリア送致にも言及されていない。回想執筆時に共産主義者としてソビエト連邦を支持する立場にあった大塚は、シベリア送致の事実の公表が日本国内の反ソ感情を高める可能性があるとして、その事実を隠し、また曖昧な組織名を使用したものと考えられる。ともかくも、グループメンバーのほとんどが戦前の日本共産党員及びそのシンパであり、「日本人共産主義者グループ」とすることは完全な虚偽ではない。あるいは、少人数の別組織で「共産主義者」を名乗る組織がつくられた可能性も否定できない。なお、大塚の回想中の「張」とは、上述の趙東黎であろう。

大塚の回想に戻ろう。1945 年 11 月、大塚と田村（三村亮一―飯塚）は瀋陽に行き、東北人民各界代表者大会（東北人民政府を樹立する準備）に出席した。これは「在長春日本人共産主義者グループ」代表としての参加であった。この大会の議長が林楓であり、大会最終日には彼が東北人民行政委員会主席に選出される予定であった。ただ大塚は体調を悪くし、大会途中で峠一夫[13]の家に転がりこんだとしている（大塚 1976 第 6 巻、68 頁）。大塚と三村の瀋

陽派遣は、上述の山田清三郎の回想と一致する。

(5) 長春左翼日本人のソ連軍による拘留とシベリア送致

①山田清三郎の回想

1945年11月11日夜、長春駅近くの共栄会館に住む山田は、ソ連軍官憲により逮捕された。先にソ連軍官憲に捕まっていた矢島直一が、保釈のために自分の過去の学生運動の経歴を証明して欲しいとして、ソ連軍官憲と共に山田宅に来たのである。山田は矢島の話しを信じて、自分の証言で矢島はすぐ保釈されると考え、それに応じた。山田が連行された場所は、満鉄の旧地質調査所（謝公館、満洲国初代外交部長謝介石の公館）の建物であった。同日夜には淡徳三郎も連行されていた（山田1957、229-235頁)。まもなくして、ソ連軍官憲による在長春日本人民主主義者同盟メンバーに対する総検挙が実施された。

山田自身も、ソ連軍官憲に斉藤慎一と進藤甚四郎の居宅への案内を求められ、両名も逮捕された。続けて、和田耕作、三輪武、東影の北川鉄夫と中村（中村敬二―飯塚)、清野清（情野義秀―飯塚）も逮捕された。ただ、菅沼一（菅沼不二男―飯塚)、大塚有章、三村亮一らは、矢島が名前を出さなかったため、検挙を免れた（山田1957、243，244頁)。進藤、斉藤、北川、中村らは一週間内外の留置で釈放されたが、山田、淡、三輪、和田、矢島は残された（山田1957、248頁)。なお、福田正義も1945年秋、一時ソ連軍に連行されたが数日で帰ったとされる（福田2004、37頁)。

②和田耕作の回想

長春における日本人左翼グループの逮捕は、1945年11月中旬のソ連、国民政府、中共の三者間のパワーバランスの変化が一因であったと考えられる。和田耕作は長春における三者の勢力関係の変化を次のように説明している。10月中旬、長春には国民党の「東北行営」が設置され、市政府と公安局も国民党の下に改組された。しかし、11月7日のソ連革命記念日を境にして中共による国民党への圧迫が強まり、11月13日の城内の中共党員の殺害事件を契機として中共が攻勢に出て、公安局長や市長のポストをその手に収め、15日には国民党弾劾の人民決起大会が市政府前の大同大街で開催される予定となった。中共による「クーデター」が予想され、「東北行営」の要人たちは、長春西郊の飛行場に避難の準備を始めた。15日には八路軍が市内に入り、人民決起大会の会場は同軍が警備した。和田は正午前に大会会場に入ったが、12時にはソ連軍により大会開催が禁止され、八路軍も南方郊外に退却した（和田1964、116-118頁)。

1945年11月8日、中共側は劉居英（中共山東分局社会部長、山東省政府秘書長）を長春市長とすることにソ連軍の同意を得て、劉は同月15日に市長に就任しており[14]、和田の回想はこの時期の政治情勢に符合する。そして国民政府側からの抗議により、ソ連軍も中共勢力の伸長を抑える方針に転じた。中共と行動を共にしていた日本人左翼グループは、中共という政治的後ろ盾を失ってしまい、仲間がソ連軍官憲により拘束されても、中共を通じて保釈を働き掛けることができなくなったものであろう。ソ連軍の官憲側は「反ソ・反動」の日本人を一定数検挙してシベリアに送るというノルマが課せられており、何らかの疑いのある日本人は次々と逮捕され、杜撰な取り調べを経てシベリア送致と決定されたのである。

1945年11月19日夜12時頃、和田は同居していた三輪と共にソ連軍により検束された。和田はすでに寝床に入っていたが、家の扉をたたく音と進藤らしき声も聞こえたので、扉を開けたところ、軍警2人と通訳が入り込んできて、和田と三輪の逮捕となったのである。和田は山田と同様に、仲間が捕まったのは、矢島直一がまず逮捕され、自分の学生時代の左翼的傾向を証明してもらいために淡と山田の名前を出し、芋ずる式に検挙されたとしている（和田2001、272-275頁)。スパイ容疑でソ連軍警の取り調べを受けた和田は、12月13日にはシベリア送りが確定した。同月17日にシベリアへ向けて移送され、汽車に同乗したのは三輪武、淡徳三郎、山田清三郎、笠神老人（満洲日報理事)、飯澤重一（満洲国総務司長）などであった（和田2001、275-299頁)。

4. 西安・通化での活動と長春への帰還（1945年12月～1946年5月）

(1) 西安での「東北建設青年突撃隊」結成

ソ連軍当局によるシベリア送致を免れた長春日本人左翼の人々は、その後どのような道を歩んだのか。彼らの一部が向かった場所が、西安炭鉱であった。

まずは林華の回想を検討しよう。林華は本名が常澤紀美子、満映の事務職員であったが、敗戦後、大塚有章と共に西安炭鉱や鶴崗炭鉱で活動し、1950年代より北京放送日本語アナウンサーを勤め、アナウンサー名が林華であった。北京では同じ職場の中国人と結婚し、中国名は林紀美であった。その林華によれば、西安市（現遼源市）は解放区として中共の管轄下にあったが、炭鉱はソ連軍が占領しており、出炭量を伸ばすことだけに集中し、炭鉱管理体制は何の改革もなされず、旧態依然の日本時代のままであった。そこに開拓団や義勇隊などの日本人難民が流入し、炭鉱労働に従事したが、劣悪な労働条件や発疹チフスの蔓延などで悲惨な状況にあった。大塚有章などは日本人救済のために同炭鉱に乗り込み、炭鉱を管理するソ連軍との交渉や日本人労働組合の組織化に取り組んだ。そこで日本人の指導組織として設立されたものが「東北建設青年突撃隊」であった（林華① 318、319頁、林華② 338、339頁）。なお、『満蒙終戦史』によれば、西安炭鉱に流入した日本人は主として長春から送り出されたものであり、ソ連軍側から大量の炭鉱従業員が必要であると要求され、長春日本人会が避難民約5000人を確保し、送出したとしている（満蒙同胞援護会1962、325頁）。

林華によれば、1945年12月に大塚に率いられた一団は西安市に行き、宿屋に宿泊し、大塚などの指導者は人民政府や炭鉱に出かけて相談し、林華などの若者は宿屋で本を読み討論を行なった。「東北建設青年突撃隊」が結成されたのは45年12月31日の夜、場所は宿泊していた宿屋であり、参加者は23、24人、指導者としては大塚有章、池田亮一、菅沼不二夫（菅沼不二男―飯塚）、中村敬二、福田某、関千里などがいたとする。そして翌朝の46年元旦には、突撃隊メンバーが炭鉱に乗り込み、日本人への働きかけを開始したとする（林華① 315-318頁）。また、林華の別の回想では、西安炭鉱の指導者として北尾忠義もいたとしている（林華② 344頁）。

次に、大塚有章の回想を確認しよう。1945年12月、大塚など一行20数名は深夜の長春を難民に化けて脱出し、西安炭鉱に向かった（大塚1957、18頁）。同年暮れ、西安市の中国旅館の一室で、「東北建設青年突撃隊」の結成大会がつつましやかに行われ、参加者は、在長春日本人共産主義者グループのメンバー数名とその指導下にあった青年10数名、合わせて20数名であった。参加者で記憶にあるのは、理論家の田村（現在中国）、北尾（病没）、ベテラン記者の福田（現在長周新聞社長）、船木（病没）、真砂、高野（現在中国）、安部（現在中国）などとする（大塚1976第6巻、25-28頁）。大塚は突撃隊を組織し中共の東北での経済建設に協力した理由として、「東北の経済建設に参加するということは、そのまま日本人民の民族解放民主主義革命の闘いに参加するのと同じ意義をもつものと考えた」と述べている（大塚1976第6巻、29頁）。すなわち、この西安炭鉱での運動は、単に日本人救済のみを目的としたものではなく、中共の意向を受けたものであろう。いずれ同炭鉱はソ連軍から中共側に引き渡されるので、中共側は日本人難民を労働者として使役させ、炭鉱の復興を進めたいと企図したものであろう。石炭は中共が内戦を戦うために不可欠なエネルギー資源であった。一方で大塚は、同炭鉱の日本人労働者に思想教育を行い、日本革命のための人材を育成したいと考えたものであろう。すなわち、中共の経済建設への協力が同時に、日本革命の展望を切り開くことであると認識されたのである[15)]。

林華・大塚の回想をもとに突撃隊結成時の参加メンバーを推定しよう。大塚回想中の、田村とは三村亮一であり、北尾が北尾忠義、福田は福田正義、高野は高野広海（仮名・関千里）、安部は林華（仮名・安部紀美子）である。横川次郎は北尾を満映にいた若い小説家としており（横川1991、124頁）、北村謙次郎は、北尾陽三という作家が満映製作部に入って監督助手を務めていたが、終戦とともに中共の文化工作隊に突っ走り、その後11年間中国に滞在していたとする（北村1960、12、13頁）。その他には、林華回想のように菅沼不二男、中村敬二もいたと考えられる。

船木に関して大塚は、次の証言を残している。すなわち、「船木正」は在長春日本人共産主義者グル

ープの結成に参加した同志であり、西安炭鉱に収容された元義勇隊の青年諸君が危機に瀕しているとの情報が入り、彼は直ちに先遣隊を組織して大塚たちより一カ月早く西安炭鉱に乗り込んだ。しかし、発疹チフスで重態となり、炭鉱の家族長屋の一室に病床をしつらえ、難民の人たちの看護を受けていた。大塚は船木夫人も伴って西安に行ったが、数日後に死去した。そして、突撃隊の旗にその姓名と死没年月日を入れた（大塚 1976 第 6 巻、52、53 頁）。このように船木は実際には突撃隊の結成大会には参加しておらず、大塚がその死を悼んで突撃隊旗に名前を留めたものであろう。「東北建設突撃隊」（鶴崗炭鉱時期に「青年」の文字を外す）隊旗には、西安炭鉱や鶴崗炭鉱で死去した隊員の姓名と死没年月日が記載されており、その最初が「船木上」であり、1946 年 1 月 12 日死没とある（飯塚⑦、127 頁）。

大塚の回想には船木の経歴の記載はなく、彼がどのような人物かは不明である。ただ、塙英夫『背教徒』には船木と思われる人物が「柴村」の名前で登場しており、かつて鉱山会社で労務管理をしていたとされ、その夫人は長らく東辺道の奥地で暮らし、敗戦直前に長春に来たとされる。そして、柴村は長春の民主連盟の一員であり、長春から西安炭鉱に大量の日本人難民が送致された際に、彼らの教育のために連盟から派遣されたとしている。その後の経緯は大塚の証言とほぼ一致し、「柴村」は発疹チフスで病臥に付し、夫人に看取られて亡くなった（塙 1953、78、79、137-163 頁）。

この船木上（のぼる）については、無政府主義者として共に活動を行った星野準二が詳しい経歴をまとめている。船木は 1919 年に鳥取県に生まれ、1930 年に父の赴任地の釜山公立中学を卒業した。その後アナキズム文献を傾読し、「黒色戦線社」同人となり、無政府主義者として『黒色戦線』の発行や農村青年社運動に取り組んだ。36 年 5 月には農村青年社事件で逮捕され、38 年 12 月東京地裁で懲役 2 年執行猶予 3 年の判決を受けた。出所後満洲に渡り、「満洲開発公社」に就職し、41 年 12 月には『満洲新聞』に「能率問題―生産力昂揚と鉱山工人」を発表した。後に「東辺道開発公社」に転じた。そして 45 年 8 月敗戦時ソ連軍進攻の際、消息不明となり、帰還しなかった（『近代日本社会運動史人物大事典』4 巻、151、152 頁）。このことから、突撃隊最初の犠牲者「船木」とは、無政府主義者の船木上とみて間違いない。なお、上記の両「公社」は正しくは、「満洲重工業開発株式会社」と「東辺道開発株式会社」であろう。

(2) 通化での日本人工作

1945 年 12 月初め、東北軍政大学、砲兵学校、航空学校、後勤部、衛生部などの中共軍の諸機関が撫順より通化に移転した[16]。こうして通化は、中共軍の重要な後方拠点となった。この後方拠点において重要な役割を担った中共軍幹部が朱瑞（1905-1948）であった。彼はソ連で学んだ砲兵の専門家であり、45 年 10 月中旬に瀋陽に派遣され、通化では通化後方司部司令員、軍政大学副校長、砲兵学校校長、航空総隊隊長などの要職を兼任していた。彼には、砲兵部隊及び航空部隊の創設という重要な任務が課されていた。林弥一郎に率いられた第二航空軍第 101 教育飛行団第 4 練成飛行隊約 300 人が中共軍に降伏しており、彼らを利用してパイロットと技術員を養成し、中共自前の空軍部隊を創建しようとしたのである[17]。

1946 年 2 月 3 日、この通化市において通化事件が発生した。それは、ソ連軍が撤退し、中共軍が進駐した同市において、在留日本人が起こした大規模暴動である。藤田実彦大佐（関東軍第 125 師団参謀長）を指導者として、国民政府軍とも呼応することを画策して、市内に残留していた旧日本軍兵士などが 2 月 3 日未明に決起した。反乱は中共側に事前察知されており、期待した国民政府軍の応援もなく、中共軍により約 2 時間で鎮圧された。暴動参加者は殺害され、事件鎮圧後には市内在住の青年男子の多くが拘束され、その中からも大量の死者が出た[18]。

実は事件発生時、朱瑞は通化にはおらず、西安に滞在していた。林華によれば、1946 年 1 月、大塚、林華などは西安で朱瑞将軍に会っている。まもなくして通化暴動発生の知らせがあり、朱瑞はすぐに通化に戻ったとしている（林華① 319 頁）。塙英夫『背教徒』では、朱瑞とおぼしき人物が龍将軍として描かれている。すなわち、龍将軍は中共軍の全満後方司令官であり、年齢 40 歳ほど、モスクワ赤軍大学出身でロシア語も堪能な優れた人格者とされている。彼は西安炭鉱接収のために西安に来て、ソ連側との交渉を行っていたが、通化暴動を知るとすぐに

同地に戻った。そして、主人公・佐伯（塙正一飯塚）も島本（進藤一飯塚）と共にそれに同行したとしている。通化では延安にて日本投降兵の教育に携わった松川（前田光繁一飯塚）という人物と協力して日本人工作にあたった。日本人工作は順調に進み、「連盟」には100名近い地元の人達が参加し、新しい連盟員を教育するための民主学校を開設し、日本人向けの合作社、劇団、小学校、新聞社などが設けられたとしている（塙1953、170-217頁）。

進藤甚四郎の回想では、彼が通化で活動した事実が語られている。通化事件発生時に進藤は「長春日本人民主連盟」に在ったが、同地にオルグを至急派遣して欲しいとの要請を受け、斉藤慎一と現地に向かった。現地では中共の温かい援助のもとで、新しく参加した人たちを含めオルグ集団を確立し、日本人全員との対話を基本にして奮闘することにした。そして、「多くの難民グループには、新しい市政府の指導を得ながら、自主的な共同の仕事を探すように援助する体制をつくり」、「他の同志は民主的日本人の若い幹部づくりの学校を開設する」などした。進藤と斉藤は、通化に約4カ月間滞在して、その後妻のいる長春に戻った（進藤1978、164-166頁）。

進藤たちは通化で何をしたのか、上記の回想は非常に分かりにくい表現である。上述のように通化は、中共軍の重要な後方拠点であった。ただ通化事件の後、同地の残留日本人には中共への不信感・恐怖感が広がっており、いかに日本人の協力を引き出すかが焦眉の課題となっていた。そこで進藤などは日本人に対する教宣活動を実施し、中共側に協力するように働きかけ、さらには学校を開設し日本人若者への思想教育を実施したのである。また、そこで活躍したのが、塙英夫の小説にも登場する「松川」すなわち前田光繁であった。通化における日本人工作については、高尾栄司の著書の中でも明らかにされている（高尾2012、155-158頁）。

次に、大塚有章の回想を確認しよう。通化事件当時、西安にいた大塚は、牡丹江市南方の鏡泊湖付近の山中に逃げ込んだ旧日本兵が山賊と化し、同地の農民を苦しめているとの情報を得た。そこで大塚はその敗残兵宣撫のために同地に向かおうと考えた。大塚はまず通化に行き、西安で面識のあった朱瑞将軍に会い、事情を話した。しかし朱瑞からは、それは重大な問題であり後方総司令部では決定できないと言われ、鏡泊湖行きは実現しなかった。大塚などはその後、杉本（前田光繁一飯塚）という同志に連れられて西安に引き返した。途中梅河口で下車し、李初梨に面談した（大塚1976第6巻、56-66頁）。それから約10日の後に、大塚は西安に帰って編成してきた一行と共に、再び梅河口に引き返した。そこで中共軍により長春が解放されたことを知らされ、李初梨などと共に長春に乗り込んだとしている（大塚1976第6巻、69、70頁）。

この大塚の「西安に帰って編成してきた一行」とは何なのか、回想には説明がない。高尾栄司は、西安炭鉱で青年突撃隊に加わり後に通化に行き前田光繁の下で働いた人物からの聞き取りをもとに、前田、大塚の西安行きは、前田が通化で活動するための日本人工作員をスカウトすることであったとしている。そして前田は青年突撃隊から8名を工作員として採用し、それは日本共産党系5名、徐隊兵3名であったとする（高尾2012、152-155頁）。大塚の回想の鏡泊湖付近の敗残兵云々は真実ではなく、大塚は朱瑞からの要請で通化の日本人工作に関する協議のため同地に向かったと考えられ、高尾の指摘のように大塚はその後、前田と共に西安に戻り工作員を編成し、通化に向かおうとしたものであろう。その途中の梅河口で長春占領の知らせが入り、大塚などは李初梨と共に急遽長春に向かい、前田と工作員一行は予定通り通化に行ったものであろう。

(3) 中共による長春占領と左翼日本人の結集

まず大塚有章の回想を確認しよう。1946年春、長春市が一時中共軍に占領され、中共中央東北局が梅河口から同市に出た。大塚は民族部長の李初梨と共に長春市に入った。そして同地で「日本人民主連盟準備会」が結成され、大塚が委員長となり、機関紙『民主新聞』を発行することになった（大塚1957、35、41頁、大塚1976第6巻、71、72頁）。

次に、小松七郎の回想（大西1980、159-165頁、小松七郎が大西信治に語った内容）を検討しよう。1946年4月、各地の日本人民主化同盟は、その代表が長春に集まったのを機会に、「在満日本人民主連盟」を結成し、委員長に大塚有章、総書記に小松七郎、役員に三村亮一、岩間義人、進藤甚四郎、斉藤慎一、石田精一[19]等々を選出した。連盟は機関紙『民主日本』を発行した。これは長春および哈爾濱

の一時期には、タブロイド版４頁の日刊紙として刊行され、日本や海外のニュース、中国政府及び在満日本人の動向などを報じた。小松七郎、井上林などが奉天監獄から解放された直後、中共側の示唆によって結成された「在華日本人共産主義者同盟」は、はじめ井上林が総書記であったが、この長春会議で民主連盟中の積極的分子を大衆的に参加させることに決定し、井上林が中共側の要請によって斉斉哈爾方面に転出するという事情もあって、小松七郎が総書記に就任することとなった。同時に、小松は民族部長・李初梨の秘書の任務も与えられた。民主連盟は５月１日にメーデー祝賀大会を主催し、豊楽劇場に約 3000 人の日本人を集めて盛大に開かれた。大塚、小松などが日本の国情、今後の民主革命について語り、李初梨は長春市政府外事局長の資格で人民政府の対日方針を得意の日本語で演説して感銘を与えた。これらは直ちに『民主日本』に掲載された。

横川次郎の回想では、1946 年春、中共占領下の長春で「日本人民主連盟」（委員長・大塚有章）が結成され、連盟事務所も開設され、横川はそこに勤務し、社会活動を開始したとしている。また、菅沼不二男を中心に機関紙『民主新聞』も発行されたとする（横川 1991、112 頁）。林華の回想では、梅河口から長春に戻るとすぐに「日本人民主同盟」が成立し、『民主新聞』を出版する予定も決まり、メーデー記念大会が元公会堂で開催され、通化から一緒に長春に入った中小路の演説もなされたとしている（林華① 319 頁）。成田精太の回想では、「日本人民連盟」主催の宣伝集会が映画館であり、メーデー歌を歌い、延安から来た日本人兵士たちの戦争の想い出話が語られ、最後に通化事件の真相と題する話がなされたとする（成田 1983、246 頁）。

加藤聖文の研究により、1946 年中共占領下の長春で日本語新聞『民主日本』が発行された事実が明らかにされている。加藤の研究によれば、この新聞は日本人政治工作員の仲小路静男（中小路静夫―飯塚）らが長春在住の若いインテリ層に働きかけて発刊されたものであるとされる（加藤 2020、66、67、250 頁、梅 2012、35 頁）。また加藤聖文編集の『海外引揚関係史料集成』補遺第３巻（ゆまに書房）には、『民主日本』（民主日本社発行）第４・５・７号が所収されており、第４号（1946 年５月７日）には、５月１日に豊楽劇場において「日本人民主連盟」主催の在長春日本人民大会が開催され、市政府外事局長・李初梨が講演したことが報道されている。

以上のように、長春の日本人組織名は小松、横川の言う「日本人民主連盟」が正確であり、その機関紙は『民主日本』であった。また、小松の言うように「在華日本人共産主義者同盟」と名乗る前衛組織が別に存在した可能性も高い。

5. 長春からの退却と哈爾濱・佳木斯への移動（1946 年５月）

1946 年５月 23 日に米軍兵器装備の強力な国民政府軍が長春に入城し、中共軍は撤退した。大塚有章はこの長春撤退時の状況を次のように語っている。46 年５月下旬、中共軍に従って長春を撤退した。この撤退は大急ぎのもので、指示を受けてから家を出るまで５分間の猶予しかなかった。大塚は腸チフスを発病して重体であったが、列車は満員であり貨物列車の屋根に乗るしかなかった。汽車での吉林移動中に友人のＫ（小松七郎―飯塚）が国府軍飛行機の銃撃により負傷した。こうして佳木斯に着いたが、大塚はその地で数カ月も静養した（大塚 1957、44、56-58 頁）。佳木斯には日本人民主連盟のほとんどが集結し、大きな寺を借り切って毎日学習会が開催された。講師は、横川、石田（現アカハタ編輯局次長）、福田（現長周新聞社長）、菅沼（最近、中国から帰国予定）などであった。連盟の運営はすべて書記長の小松を中心に行われた。そして、盛夏が終わった頃に仲間は、東北局民族部に同行して哈爾濱へ移動したが、病気の大塚は佳木斯に残った（大塚 1976 第６巻、72 頁）。

林華の長春からの撤退は大塚と同じ列車であったとみられ、機銃掃射による小松の負傷を目撃している。林華によれば、佳木斯では「佳木斯日本人民主同盟」が結成され、半月後には西安炭鉱から突撃隊員 50 人、八路軍の捕虜となった日本軍兵士の工農兵学校からも何十人も来て、総勢 100 人を超えたとする。そして佳木斯の日本の大きなお寺に皆を収容して、２カ月の学習期間を過ごした（林華① 320 頁）。

横川次郎の回想は以下の通りである。横川も 1946 年５月に長春から撤退し、哈爾濱に移動した。哈爾濱には日本人民主連盟の幹部が相次いで到着し、日

本人に対する救済、宣伝、啓蒙教育の活動をしていた。横川は一時期、斉斉哈爾に派遣されたが、そこには井上林がおり、趙安博が同地の日本人管理委員会の責任者であった。同年初夏に多くの日本人は佳木斯に移動し、寺院での学習会が開催された。講師は池田亮一、菅沼不二男、横川次郎、福田（福田正義－飯塚）などであった。学習会の参加者は100人近くいたが、全員が民主連盟員ではなく、流動性が大きかった（横川1991、113-115、120-122頁）。

以上のように、長春に集結した左翼日本人は、中共軍の撤退に伴い哈爾濱、佳木斯、斉斉哈爾などへと移動したのである。

6. むすびにかえて

諸回想及び小説『背教徒』などから判明したことは下記の通りである。

戦後長春において、左翼日本人の人々により、「在長春日本人民主主義者同盟」（山田清三郎、淡徳三郎）、「民主連盟」（和田耕作）、「日本人民主同盟」（北川鉄夫）などの、「民主」を冠した組織が結成されたことは間違いない。また、諸回想に氏名が登場し、この組織結成に参画したと推測されるのは、以下の人々である。まず、合作社事件関係者としては進藤甚四郎、塙正、情野義秀、斉藤慎一であり、満鉄調査部事件関係者が和田耕作、三輪武、野間清、石田精一、横川次郎、松岡瑞雄、鈴木小兵衛、満映関係者が大塚有章、三村亮一、中村敬二、北川鉄夫、高野広海、北尾忠義、その他が淡徳三郎、山田清三郎、菅沼不二男、福田正義、松岡二十世、矢島直一、船木上であった。総数24人となり、山田清三郎の「同盟」総会参加者約40人との回想よりは少ないが、和田耕作の「連盟」第1回会合参加者約20人とほぼ符合する。本稿では瀋陽の状況はあまり解明できなかったが、同市には合作社事件関係者の小松七郎、井上林、岩間義人がおり、さらに峠一夫、栗木一夫の存在も確認できた。瀋陽では中共中央東北局の直接の指導により活発に活動が展開されたと言われ、小松七郎の回想のように「在華日本人共産主義者同盟」を名乗っていた可能性が高い。

長春の左翼日本人グループは、一時期ソ連軍将校からの支援を受けることができたが、基本的には非公然活動であった。活動内容は野坂参三からの指示もあり、学習活動による組織強化、日本人向け新聞の発行、難民救済の積極的展開とそのための日本人民団組織の民主化にあった。また同グループは長春の中共組織との接触にも成功したが、中共自体が非公然活動であり、同グループの影響力の行使には限界があったと推察される。ともかくも日本語新聞として『新京ニュース』（和田耕作）あるいは『情報』（山田清三郎）なるものが刊行され、日本人民会にグループの人員を送り込むこともできた。

1945年11月、長春左翼日本人グループメンバーのソ連軍官憲による一斉検挙がなされた。そして、和田耕作、淡徳三郎、山田清三郎、三輪武、松岡二十世、矢島直一などがシベリアに送致された。シベリア送致を免れた人々の一部は、国民政府の圧迫を避けるために西安炭鉱に活動の場を移した。そして大塚有章を中心に「東北建設青年突撃隊」が結成され、同炭鉱の日本人労働者への教宣活動が実施され、中共の生産活動への協力と同時に日本革命のための人材育成が企図された。大塚にとって、中国の社会主義革命を成功させることがすなわち、日本革命の展望を切り開くものであった。

1946年2月の通化事件の後には、長春左翼日本人グループの一部が通化に乗り込み、延安からの「日本人民解放連盟」メンバーとも協力して日本人工作にあたった。そして同年4月の中共の長春占領時には、東北各地の左翼日本人が多数長春に結集し、「日本人民主連盟」の結成となったのである。ただ、同年5月には中共軍の長春撤退となり、彼ら日本人たちの多くも中共軍と行動を共にした。そして向かった場所が哈爾濱よりさらに奥地の佳木斯であった。

1946年5月に長春より撤退した人々のその後の動向を簡単に紹介しよう。

1946年8月、哈爾濱の日本人民会の組織が「哈爾濱市日本人遣送民会」と改称され、小松七郎が副会長に就任し、大塚譲三郎が救済部長となった。そして両名は日本人の引揚事業に関わった（飯塚③18頁）。ただ、小松などは葫蘆島を経由しての通常の引揚ではなく、中共が手配した特別ルートで帰国した。同年9月、小松七郎を団長として、進藤甚四郎、大塚譲三郎、福田正義などとその家族の一団は、哈爾濱から北朝鮮に入り、平壌では金日成にも会い、12月に元山から日本への引揚船に乗り、47年1月佐世保に上陸している（福田2004、40頁、飯塚③

19 頁)。

1946 年末、大塚有章、横川次郎、北尾忠義などは、西安炭鉱で活動していた突撃隊隊員 20 数名を引き連れて鶴崗炭鉱に入った。鶴崗では、炭鉱労働者を幅広く組織するために突撃隊の名称から「青年」の文字が外され、「東北建設突撃隊」と改称された。そして同隊を主体にして、中共協力のための石炭増産運動や思想教育、さらには各種文化工作などが展開されたのである(横川 1991、122-124 頁、秦 2019、357 頁)。

他方で斉斉哈爾において活動した日本人もいた。趙安博の回想によれば、彼の斉斉哈爾到着は 1946 年 4 月であり、同地において井上林、石田精一、前田光繁らと相談して、『民主新聞』を発行したとされる(水谷 2006、89-91 頁)。

最後にシベリアに送致された人々についても簡単に触れておこう。

矢島直一は酷寒のシベリア護送がたたって健康を損ね、長い病院生活の後、ソ連のカザフ共和国首都アルマ・アタ(現アルマティ)の土と消えたとされる(淡 1948、166 頁)。松岡二十世は 1948 年 3 月に極東のコムソモリスクにて死去している(松岡 2013、792 頁)。

淡徳三郎、山田清三郎、和田耕作、三輪武は、シベリアからアルマ・アタに移送され、同地で抑留生活を送った。同地で、淡などは『日本新聞』の「友の会」をつくり、会を拡大させ、民主グループをつくった。その委員長には山田がなり、淡、三輪、和田は研究会や講習会の講師となり、収容者たちの啓蒙と民主教育につとめた(山田清三郎「アルマ・アタでのこと」淡徳三郎追悼録刊行会 1980、127、128 頁)。さらに山田は 1949 年 11 月にはハバロフスクに移動となり、相川春喜の後を引き継ぎ『日本新聞』の編集長となった。そして山田の帰国は 4 人の中で最も遅い 50 年 4 月であった。山田は帰国後、46 年 1 月に妻が長春で亡くなっていた事実を初めて知った(山田 1958、221、252)。こうした左翼日本人のソ連抑留時代の「民主化運動」についての研究は、今後の重要な課題である。

(注)

1) 三輪武(1906-?)、1931 年京都帝国大学経済学部卒業、33 年満鉄入社、経済調査会第 4 部関税班に配属。その後経済調査会新京幹事室、天津事務所調査課、上海事務所調査室、東京支社調査室などに勤務。42 年応召によりマレー戦場に派遣され、岩畔機関などに所属。43 年 4 月検挙され、45 年 5 月判決。同年 11 月ソ連軍により抑留、49 年 12 月帰国。日本水素株式会社、福島殖産株式会社を経て、東方科学技術協力会副会長(井村 1996、759 頁)。

2) 野間清(1907-1994)、愛媛県に生まれる、1931 年京都帝国大学法学部卒業、同年満鉄入社、交渉部配属。その後、総務部調査課、経済調査会第 5 部、産業部資料室などで勤務し、37 年 4 月より 2 年間欧米留学。帰国後、調査部綜合課などに勤務するが、42 年 9 月検挙され、翌年 3 月満鉄を依願退職。45 年 5 月判決、7 月満洲国通信社嘱託。同年 9 月中長鉄路公司理事会調査処(長春)に留用、以後東北自然科学院、瀋陽農学院等に留用され、53 年 8 月帰国。中国研究所を経て、57 年愛知大学教授、84 年同大学退職(石堂ほか 1986、奥付略歴、井村哲郎「野間清先生を悼む」『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』第 6 号、1994 年)。この経歴からは国共内戦期の野間の足跡は明らかではない。成田精太によれば、46 年 5 月に野間は中共と共に長春を退却したとされ(成田 1983、256 頁)、獣医学を専門とし技術者として中共に留用された富岡秀義によれば、野間は佳木斯農業試験場に勤務した後、48 年 11 月に哈爾濱獣疫研究所の政治指導員となり富岡など留用技術者の学習活動の講師となったとされる(富岡 1991、76-87 頁)。

3) 長春における日本人居留民組織は、「長春市日本人会」との名称であった(満蒙同胞援護会 1962、341-343 頁)。

4) 李初梨(1900-1994)、四川省江津県出身、1915 年日本に留学し、25 年京都帝国大学文学部入学。27 年帰国、「創造社」に参加し、上海にて中共の文化工作に従事する。31-36 年上海にて投獄され、出獄後延安に行き「新華通訊社」社長となる。日中戦争期には、中共中央軍事委総政治部敵工部副部長、日本工農学校副校長として、日本人捕虜工作を担当した。戦後は東北に派遣され、中共中央東北局民族部長、遼寧省政府外事庁長として日本人工作に当たった(百度百科、https://baike.baidu.com/item/%E6%9D%8E%E5%88%9D%E6%A2%A8/9026628?fr=aladdin、2021 年 10 月 10 日閲覧)。

5) 水野正昭「中国人民解放軍従軍記」(1)、http://chuubunkai.web.fc2.com/chuubunkaihp/cbk.pdf/mizuno1.pdf、2021 年 9 月 24 日閲覧。

6) 松岡二十世は早くも 9 月 28 日にソ連軍により拘束された。それは満洲国協和会文化部次長という要職にあったことが理由であろう(松岡 2013、763、764 頁)。

7) 古丁(1914-1964)、吉林省長春県生まれ、本名は徐長吉。満鉄経営の長春公学堂、瀋陽の南満中学堂に学び、東北大学を経て 1932 年北京大学に入学。翌年北方左連(中国左翼作家連盟北平分盟)に関係し逮捕。満洲に戻

り官吏となり、国務院法制局統計処などに勤務した。一方で「芸文志派」と称される文学グループの中心として文学活動を行い、大東亜文学者大会にも出席した。国共内戦期は中共側で活動し、新中国では演劇方面に関わったが、58年の反右派闘争で投獄されて64年に獄死した（貴志俊彦ほか編『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、287、288頁、石田卓生執筆）。

8）趙東黎（1914-1985）、遼寧省岫岩県出身、本名は趙志平。東北大学歴史系卒、1938年8月に革命に参加し、同年10月中共入党。陝北公学助理員を経て、冀東情報連絡站情報研究員となる。43年夏、党組織より東北の農安県に派遣され、商人を装い地下党の情報連絡活動に従事した。日本敗戦時長春に入り、大衆団体工作を行ない、45年9月に中共長春特別市委員会が設立されると、委員兼宣伝部長となった。46年4月に長春が中共の支配下に入ると同市寛城区党委員会書記となり、48年春に中共長春工作委員会が九台に設立されると組織部長となり、同時に幹部育成のための長春学院を創設した。48年10月の長春解放後は長春市教育局局長を務め、新中国成立後には長春市党委員会統戦部部長、同工業部部長などを歴任した（王鴻賓等主編『東北人物大辞典』第2巻（上）、遼寧古籍出版社、1996年、1266頁、「紀念長春解放70周年系列史話（四）長春解放中那些功勲卓著的共産党員」長春市人民政府HP、原載は『長春日報』2018年10月24日、http://www.changchun.gov.cn/zjzc/mlzc/ls/201810/t20181024_458090.html、2021年9月13日閲覧）。

9）「紀念長春解放70周年系列史話（三）艱苦的闘争偉大的勝利」長春市人民政府HP、原載は『長春日報』2018年10月19日、http://www.changchun.gov.cn/zjzc/mlzc/ls/201811/t20181113_459365.html、2021年9月13日閲覧）。

10）山口猛『幻のキネマ満映』（平凡社、2006年）316頁。

11）『満蒙終戦史』の長春市日本人会（1945年11月26日）組織図の中に、救済部第二救済班・松岡瑞雄の名前がある（満蒙同胞援護会1962年、343頁）。

12）1945年11月7日の瀋陽でのソ連革命記念日祝典について、宇佐美喬爾の回想では、瀋陽市日本人居留民会もその祝典に参加したとあるが、同日の民主的組織確立のための集会については言及がない。また宇佐美は、中共側の対日本人責任者を外交庁長・李松齢とし、京都帝国大学法学部卒としている（宇佐美1983、151、170頁）。

13）峠一夫（1909-1981）、大阪市生まれ、1929年第三高等学校放校。その後労働運動に関係し30年12月共産党入党、31年9月検挙され服役。39年渡満し42年満洲国協和会職員（奉天市勤務）。46年瀋陽市において蔣介石軍に検挙投獄されるも、同年6月帰国。後に大阪府民医連事務局長、全日本民医連事務局長。峠三吉の兄（桑原1981）。

14）李海善主編『長春市志・政府志』（吉林市人民出版社、2004年）102頁。

15）『満蒙終戦史』では、中共及び中共に協力した日本人共産主義者が、日本人の利用に対していかに認識していたのか、興味深い記述がある。すなわち、日本人共産主義者は、「少しでも多くの日本人を中国に留めて、これに共産主義的教育訓練を施し、中国統一後の中共政権に帰依させ、日本革命の尖兵としてアジアの共産化に協力させる」との考えであり、中共側の方針は、「中共が内戦遂行の過程においてもっとも欠如している能力、すなわち技術能力と工業経営能力とを日本人の力によって補充し、その戦力の基礎を強化しよう」としたとの見方である（満蒙同胞援護会1962、714頁）。

16）劉統『東北解放戦争紀実』（人民出版社、2004年）131頁。

17）飯塚靖「国共内戦期・中国共産党による東北根拠地での兵器生産」（Ⅰ）（『下関市立大学論集』第57巻第3号、2014年1月）11、23頁。

18）前掲『二〇世紀満洲歴史事典』635頁、門間理良執筆、高尾2012、参照。

19）石田精一（1906-？）、山口高等商業学校から九州帝国大学に進み、プロレタリア科学研究所、産業労働調査所の活動に参加。1933年共産党入党、34、37年に検挙され、転向。38年満鉄に入社し、調査部などに勤務するが、42年9月満鉄調査部事件に連座して検挙。敗戦後中共の日本人関係の部署に留用され、後に北京機関の活動に参加し、56年帰国。61年の第8回共産党大会で中央委員となり、『赤旗』編集局長を務めた（渡部1999、252、253頁、井村1996、737頁）。

参考文献

秋山良照『中国土地改革体験記』（中公新書、1977年）

秋山良照『中国戦線の反戦兵士』（徳間書店、1978年）

石堂清倫『わが異端の昭和史』（勁草書房、1986年）

石堂清倫・野々村一雄・野間清・小林庄一『十五年戦争と満鉄調査部』（原書房、1986年）

井村哲郎編『満鉄調査部－関係者の証言－』（アジア経済研究所、1996年）

岩船省三『共産党員から基督者へ』（日本基督教団出版部、1952年）

宇佐美喬爾『ああ満鉄』（講談社、1983年）

梅震『戦後の満洲四星霜』（1958年）植民地帝国人物叢書63 ;< 満洲編24>（ゆまに書房、2012年）

大塚有章『新中国物語』（三一書房、1957年）

大塚有章『老兵はいどむ』（私家版、1974年）

大塚有章『新版未完の旅路』第5巻（三一書房、1976年）

大塚有章『新版未完の旅路』第6巻（三一書房、1976年）

大西信治『満洲農村合作社運動の記録』（龍渓書舎、1980年）

香川孝志・前田光繋『八路軍の日本兵たち』（サイマル出

版会、1984 年）
「合作社事件」研究会編・解説『「合作社事件」関係資料』第 1 冊、第 2 冊（十五年戦争極秘資料集、補巻 34）（不二出版、2009 年）
加藤聖文『海外引揚の研究－忘却された「大日本帝国」』（岩波書店、2020 年）
関東憲兵隊司令部編『在満日系共産主義運動』（極東研究所出版会、1969 年、原本 1944 年発行）
岸富美子・石井妙子『満映とわたし』（文藝春秋、2015 年）
北川鉄夫「敗戦から引き揚げまで―中国東北 (満州) での回想」（青地晨ほか編『外地に骨を埋ずめて』ドキュメント太平洋戦争⑤、汐文社、1975 年）
北村謙次郎『北邊慕情記 : 長篇随筆』（大学書房、1960 年）
木村荘十二『新中国』（東峰書房、1953 年）
草柳大蔵『実録満鉄調査部』上・下（朝日新聞社、1979 年）
桑原英武編『情熱とロマンの人 : 峠一夫を憶う』（峠一夫追憶集編集委員会、1981 年）
秦剛「鶴崗炭鉱日本人の文化活動と『戯曲蟹工船』」（『ツルオカ』復刻版、三人社、2019 年）
進藤甚四郎『どっこい生きてきて』（東銀座印刷出版、1978 年）
菅沼不二男「中国に生きた私の半生―民衆の革命―」（『世界』第 194 号、1962 年 2 月）
高尾栄司『「天皇の軍隊」を改造せよ―毛沢東の隠された息子たち』（原書房、2012 年）
淡徳三郎『三つの敗戦』（時事通信社、1948 年）
淡徳三郎追悼録刊行会編『淡徳三郎追悼録』（淡徳三郎追悼録刊行会、1980 年）
中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2003 年）
中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『続　新中国に貢献した日本人たち』（日本僑報社、2005 年）
常澤巌『失われた日記』（東銀座出版社、2001 年）
富岡秀義『私の歩んだ道・1945 ～ 1967』（私家版、1991 年）
成田精太『瓦解』満洲叢書・祖国への道第 2 巻（国書刊行会、1983 年、原書は 1950 年、北隆館より出版）
野々村一雄『回想満鉄調査部』（勁草書房、1986 年）
塙英夫『背教徒』（筑摩書房、1953 年）
塙英夫『自由の樹』（河出書房、1956 年）
福田槐治他編『福田正義の生涯―家族による編纂』（長周新聞社、2004 年）
福田実『満洲奉天日本人史』（謙光社、1976 年）
藤原彰・姫田光義編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』（青木書店、1999 年）
前田光繁編・訳・著『通化二三暴動の真相 : 彼らはなぜ中国で死んだのか 中国の証言』（教育出版センター、1993 年）
松岡將『松岡二十世とその時代』（日本経済評論社、2013 年）
松岡將『王道楽土・満洲国の「罪と罰」』（同時代社、2016 年）
満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、1962 年）
『未完の旅路』刊行委員会編『追悼大塚有章』（私家版、1980 年）
水谷尚子『「反日」以前　中国対日工作者たちの回想』（文藝春秋、2006 年）
森功『竹僑の人北條秀一：満州行き帰り道は六百八十里』（兵庫県青少年問題研究会、1988 年）
山田清三郎『転向記・嵐の時代』（理論社、1957 年）
山田清三郎『転向記・氷雪の時代』（理論社、1958 年）
山田清三郎『ソビエト抑留紀行』（東邦出版社、1973 年）
山田清三郎『わが生きがいの原点』（白石書店、1974 年）
横川次郎著・陸汝富訳『我走過崎嶇小路―横川次郎回憶録』（新世界出版社、1991 年）
林華「回想『ツルオカ』」（林華①）、林華「鶴崗炭鉱で活躍した『東北建設突撃隊』について」（林華②）（『ツルオカ』復刻版、三人社、2019 年）
和田耕作『私の昭和史』（新世紀出版社、1964 年）
和田耕作『激流に生きる』（和田民主政治研究所、1984 年）
和田耕作『大戦争の表と裏－潜り抜けた幸運な男の記録』（富士社会教育センター、2001 年、第 2 刷）
和田春樹『歴史としての野坂参三』（平凡社、1996 年）
渡部富哉監修、伊藤律書簡集刊行委員会編『生還者の証言―伊藤律書簡集』（五月書房、1999 年）